

以上、4つの遺構の土師器の杯・皿について、法量を行うと次のようになる。

杯に関しては、SK1084土壇出土のものは、口径12.7～15cmと幅が広く、SE1340井戸は、口径12.6～13.6cmとこれらは、ほぼ13cm前後に集中するようである。

皿に関しても、SK1084土壇の口径18cm代の大形のものから、SE1340井戸の13cm代の小形化への変化がわかる。

その他、杯に関しては、SE1081井戸とSK1084土壇出土のものには、ヘラミがきが施された精製土器がみられるが、SK053土壇とSE1340井戸出土のものになると、横ナデ調整がみられるくらいで、ミガキは施されていない。

以上のような結果より、I-1A類以前の4つの遺構の流れをみると、法量で1番大きな広がりをもつSK1084土壇をSE1081井戸のものよりやや古手のものと考え、奈良時代後半（8世紀後半）として、国分寺SK053土壇とSE1340井戸をほぼ同時期として、8世紀終末から9世紀初頭として推定し、これらをI-1A類に先行するものと考えた。

2・ 輸入陶磁器にみられる焼台および重ね焼の痕跡について

陶磁器が窯内においてどのように焼成されたか知る手掛りとして焼台の跡、重ね焼の跡がある。これを整理、分類することにより、どのような窯道具を使用したか窺うことが可能であり、また進んで、我地出土の陶磁器が彼地のどの窯のものであるのか同定作業の一端を担うことができると考えられる。

焼台および重ねが器面に施釉された部分に直接接した場合はその部分に明瞭な痕跡を残し、焼台の種類および重ねの仕方を想定できるが、露胎部分に置かれた場合はその跡を残さないのが通例である。しかし、内面見込み部分や高台の内側を環状に釉をカキ取って露胎とした場合釉が若干なりともそこに残る事があり、そこに焼台、重ね焼の跡が残る。それらの痕跡を手掛りに、ここでは報告書の分類順にそれらの痕跡について述べることにする^(註1)（図版 1～4）。

A類（1～12） 1・2は細く高い高台を有し、全面に施釉されたもので、高台内側に円筒の先端を台形に削り出したような焼台の跡を残し、内底見込みに重ね焼きの跡はない。すなわち台形の焼台は使用するが重ね焼きをしない一群である。3は円盤状の底部を有するもので、内底に白砂を置きその上に直接器を重ねて焼成している。4・5は平底の底部周縁を回転ヘラ削りしたもので、平坦部分では重ねは行わず、その削られ斜行した部分に重ねの目跡がみられることから、この削りは重ねのためと考えられる一群である。6・7はいわゆる蛇ノ目高台を

有するもので、高台畳付に焼台および重ねの目跡がある。この蛇ノ目高台を有するものは全面施釉した後に高台畳付部分の釉を削り取るものと、体部まで施釉し、外底には施釉しないものと二種類あり、資料が少ないため断定できないが、後者には内底に重ねの目跡があるものが多いようである。8～11は断面四角形の低い高台を有するもので、全面施釉した後に高台畳付部分の釉を削り取りその部分が焼台と接する。8の内面見込みには目跡はないが、この種の中では数少ないものである。12は1～11までの越州窯系青磁と容相を異にしたもので、胎土中に砂粒が多く、釉色は濃緑色を呈し、光沢はなく不透明なもので、5つの目跡を特徴とする。現在のところ出土する時期も11世紀後半に限られ、A類としてよいかどうか筆者は疑問に思っているものである。

B類 (13) 「蛇ノ目」高台を有する白磁碗で、高台畳付部分の釉をカキ取っていることから、この部分を焼台の上に載せて焼いたと考えられる。また、内面に重ねの痕跡はないことから重ね焼きはしていないと考えられる。

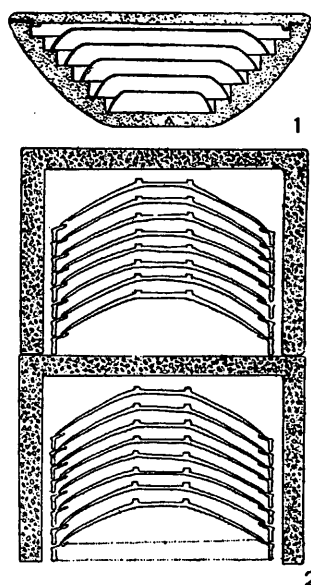
G類 (14・15) 内面見込みの釉を環状にカキ取り、重ね焼きしたもので、釉が十分にカキ取られていない場合は重ねの痕跡が濃く残存する。

L類 (16) 内面見込みの釉を環状にカキ取ったものでG類と同様な重ねを行っている。

O類 (17～20) 口縁部の釉をカキ取った碗と杯で、器を逆にして焼台の上に伏せて焼いたものである。17・19は釉をカキ取った部分以外は全面施釉したもので、器相互の接触はないが、18・20は初めから底部に施釉されていないこと、また20の底部をみると底部と底部を重ねたような跡があることから、一方は伏せ、他方は底部の上に載せて焼いたものと考えられる。なお、この類の焼成の仕方については小山富士夫氏により10図のような焼台および匣鉢を想定されている。^(註2)

P類 (21～23) 21・22のように外底部の釉を削り取ったものと、23のように最初から施釉しないものがあり、外底周縁に付着物が時折観察できることから、焼台の上に載せて、焼いたものと思われる。また器を相互に重ねることはない。

M類 (24) その他の白磁として分類されている皿で外底周辺に細く低い高台を削り出しており、その畳付部分に焼成時の付着物が若干残っている場合があり、内底に重ねの痕跡がないことから、焼き台の上にそれぞれ単独に直接置いたものと考えられる。



10図 1. 湖田窯跡出土匣鉢想定図
2. 定窯跡出土焼台・匣鉢想定図

R類 (25~39) 断面四角形の高台を有する龍泉窯系の碗で、文様により R₁ (26・27・30・34・36), R₂ (28・35) R₃ (29・37), R₄ (25・31~33・38), R₅ (39) の5つに分類している。この類の焼台は三足(25), 四足(26~33), 棒(筒)状(34~39)の3種ある。このうち棒(筒)状の焼台の場合は内底に重ねの痕跡を残すことはなく、ひとつひとつ単独に焼台に載せられたと考えられる。しかし、三足・四足の焼台の場合少数の例であるが内底にその目跡を残すものがあり、道具を使用した重ね焼きが行われていたことが知れる。

S類 (40~43) 龍泉窯系青磁の平底の皿で、三足(40), 棒(筒)状(41~43), 2種類の焼台を使用している。現在のところ内底に重ね焼きの痕跡を残すものは出土していない。

T類 (44~47) 断面三角形に近い高台を有するもので、全面施釉した後に、焼台との癒着を防ぐため高台先端だけでなく高台下部の釉を削り取って露胎としている。内面に重ねの跡がないことから1点1点焼台の上に置いて焼成したものと考えられる。47は伏焼きの方法もとったのであろうか口縁端部の釉をも削り取って露胎としている。しかし、この種のものは全体量からみると全く稀有な例である。

V類 (48) その他の青磁として分類しているもので、全面施釉した後に高台の内側の釉を丸く削り取っている。このことから棒(筒)状の焼台の上に置かれて焼かれたものと考えられる。この類では他に高台の内側を環状に釉を削り取るものもあり、その場合は焼台の先端が凹んでいるものと想像できる。

U類 (49~54) 同安窯系青磁といわれているものである。この類のものは54のごとく重ねの跡がないのを通例とするが、稀に4つの目跡を有するもの49, 内底見込みの釉を環状に削り取ったもの51・52などがあり、器を重ねて焼いていたものもあることが知れる。53・54の皿の底部には円形に変化した部分があることから棒(筒)状の焼台の上に載せて焼いたものと考えられる。

X類 (55~60) 青白磁として分類されているもので、55~57は碗, 58・59は皿, 69は瓶である。55・56・58・59は外底部を露胎とし、円筒状の焼台の上に載せて焼いているが、57・60は外底周縁に焼台の痕跡が残っている。

Z類 (61~63) 朝鮮製の青磁で、61は三足の焼台を、62は高台壘付付近に焼台の跡が、63は焼台の上に砂を置きその上に置かれて焼成されている。この類は更に分類する必要があるが出土数も少ないことから一括して扱っている。

以上、各類の焼台および重ね焼跡について概略を述べてきたが、それらの特徴を要約すると以下のごとくなる。

- A類 焼 台 a 台形の突起をもつもの。
- b 底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 a 重ね焼きをしないもの。

- b 白砂をおいて器どおしを直接重ねて焼くもの。
- c bのような重ね焼きをしたか突起のある道具を用いたか不明なもの
- B類 焼 台 底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 重ね焼きはしない。
- G類 焼 台 底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 内面見込み部分の釉を環状にカキ取り重ねて焼く。
- L類 焼 台 焼台底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 内面見込み部分の釉を環状にカキ取り重ねて焼く。
- O類 焼 台 a 伏せ焼きのための台。
- b aよりも器の高さの分だけ間隔の高い受台を有する焼台か匣鉢。
- 重ね焼 a 重ね焼きはしない。
- b 底部どおしを重ねる。
- P類 焼 台 棒（筒）状のもの。
- 重ね焼 重ね焼きはしない。
- R類 焼 台 a 三足の突起のあるもの。
- b 四足の突起のあるもの。
- c 棒（筒）状のもの。
- 重ね焼 a 重ね焼きをしないもの。
- b 三足の突起のあるもの。
- c 四足の突起のあるもの。
- S類 焼 台 a 三足の突起のあるもの。
- b 棒（筒）状のもの。
- 重ね焼 重ね焼きはしない。
- T類 焼 台 底径よりも大きなもの。
- 重ね焼 重ね焼きはしない。
- また、47のように口縁部の釉をカキ取ったものもあり、O類のような構造を有する焼台か匣鉢に入れて焼成されたものもある可能性がある。
- U類 焼 台 a 不明
- b 椀では、高台径より小さな円筒状のものを用いた可能性がある。
- c 皿では棒（筒）状のもの。
- 重ね焼 a 重ね焼きをしないもの。
- b 白砂を用いるもの。
- c 内面見込みの釉を環状に削り取って重ね焼きするもの。

X類 焼 台 a 底径よりも大きなもの。

b 円筒状のもの。

重ね焼 重ね焼きは行わない。

Z類 焼 台 a 三足のもの。

b 底径よりも大きなもの。

重ね焼 a 重ね焼きをしない。

b 白砂を用いて器を直接重ねる。

以上述べてきた焼台および重ね焼の痕については、前川氏が事故による急逝の直前に御笠川南条坊遺跡出土のものを短時日のうちにメモとして撮影していたものをもとにし、彼との日頃の討論をふまえて記述したつもりであるが、ここで述べた内容より以上のものを彼は把握していたと考えられるが、筆者の力量不足から十分に彼の考えを浮き彫りにできなかったことを深くわびたい。この焼成時における焼台・重ね焼きの課題は陶磁器を研究する上で大きな役割を果たすと筆者は考えており、この前川氏の業績を踏まえて今後さらに問題点を煮つめて行きたい。

註

1. ここで、使用する焼台の用語は、焼台と器が接する部分のうち、焼台の方が大きい場合はその種類については明らかでないので器と接する部分の特徴を記し、小さい場合はその形状について記すことにする。たま、焼成時に匣鉢を使用したかどうかはある程度予想できるにしても不明な部分が多く、ここでは匣鉢の中に入れて焼成された場合も焼台として記す。
2. 小山富士夫『陶器講座 第6巻 中国Ⅱ・宋』雄山閣 1971